

京鹿子

全一册
一九六一年
一月
人民文学出版社

12月号

鈴鹿呂仁
拾掬集 その六十三



木の実落つ羅漢のうしろ小暗がり
晩秋の日暮れ拾へば風になる
晩秋の鐘の一打は弥陀ごころ
新米や夜汽車に包くむ里訛り
霜降の街少年は屯たむろ解く

賜猛る勝者の論理片手落ち
撫で肩に小春日零す猫の窓
姿見に末枯るるもの崩れだす
落武者の肩に見覚え鬼の子鳴く
系露忌四句
秋冷のてのひら愛し数珠の黙
翳まろ転ぶ七坂八坂冬の蝶
風悼む鳥辺野の空白まんじゅしゃげ
小牡鹿の憂き音の空に雲ひとつ
俳句四季十二月号
初スキーひっぱりだこの冷湿布

近詠

和田 照海



尾花蛸

眈に紫苑の風や裔の夢
尾花蛸漁る男浪女波かな
雁渡し伏目に在す石地藏
邑鴉の柿熟す順知り尽す
潮騒へ彩の極まる唐辛子

近詠

松本 鷹根



浮御堂

神木の傍の手水の澄み渡る
彩りを親しむ堤秋高し
湖入日新酒飲み乾す友とあり
落し水夕日の影に刻惜しむ
浮御堂鴉の連贄入江風ぐ



月の雫

真夜ひとり月の雫に濡るるかに
月光に透けるニンプの翅ひかる
放牧の牛に牛道露しぐれ
秋高し舶来といふ紅茶櫃
コスモスに風無き午後
の退屈

英華採集

鱗雲かぞへ切れない義理不義理
人と人のお付き合いを上手に熟す人は、義理と人情の使い分けが出来る人と言えるが、往々にしてその義理が果たせないことがある。義理と不義理は表裏の言葉だが人間社会には欠かせない言葉の一つ。果てしなく空に広がる鱗雲を見ていると、その魚の鱗は正しく義理と不義理の連鎖である。この連鎖を断ち切ることは出来ないが、上手く泳ぐことは可能である。ストレスを抱えずに日々の暮らしに生きていきたい、との警鐘の一句。

京都 見館 定子

手折りてもまだ風のもの花芒

北桑田 中野 弘子

仲秋の名月が見られる頃は、芒の穂の銀波の揺れが何とも言われぬ風趣を醸し出す。月見のために縁先に飾る芒を刈ったのであるか？ 数本を手折ってみて掌の芒に何か微かな動きを感じとったのは風である。作者の掌に息づく芒は、まだ風に揺れている、と見た感覚は紛れもない俳句的発想となり作者の心の中でも揺れている。無いものが有ると感じた時に生れるものは、正しく詩である。

真打ちに影打ちの妙月明か

栗 東 小谷 知里

映画のワンシーンに口に懐紙を咥え銘刀を蝋燭に翳す場面は、何かを暗示させるような働きがある。刀鍛冶が刀を打つ場合は、複数の刀を打つと言われ、その中の一番良いものが真打ちとなり依頼主に渡され他の何本かは影打ちと呼ぶらしい。掲句は、何かの折に見かけたものであるが「真」と「影」がもたらす言葉の面白さに加え季語の「月明か」により月光が妖しく銘刀を浮き立たす効果を出している、と言える。

神麓集

十二月 沼田巴字

堂塔を覆ひ尽して冬霞
四十雀の集まる日なり父忌日
老いるとは遊べということ十二月
檉落葉刻一刻を消すやうに
かるがると行くこの道や日脚伸ぶ

鮎の骨 丸井巴水

秋すこし棲みて矢鱈とひとを戀ふ
ひと夏でふとりし蛇が逃げてゆく
熱湯に鮎の骨だし外は暮れ
秋蟬の森を浮かべて沼うつつ
流れ星刺さる山嶺遠吠ゆる

名月 植村蘇星

天高し天晴れ天守日本晴れ
名月や脇役の雲うす衣
京情緒みやげ話や初しぐれ
これやこの俳景繚乱秋深む
朝ぼらけ日々これ自問深む秋

すつくと立つ 北川孝子

すつくと立つ脚力きららくれの秋
粗塩の手にきしきしと暮れおそき
晩秋や昨日の夕刊今朝は古紙
晩秋のほつそりと来し川の音
子の正論まともに受けて末の秋

桔梗 直江裕子

きつかけは桔梗これでよいのかと
宵といふやはらかき刻酔芙蓉
実柘榴の軌む音して少し開く
脱力のゆきつくとこころ鰯雲
美し女の目でたしなめる良夜かな

沢の音 伊藤希眸

からす貝掌に黒々と秋深む
空と海曳きあふ紺を白鷺来る
ふくよかな母情の腕秋蚊刺す
風は秋魍(すだま)だったか野をはしる
さもあらむ落葉溜めたる沢の音

青無果花 高木晶子

遠雷や嵩高く積む紙の山
何処にも絵になる日傘見当らず
同じ夏過せし梨を掌に乗せる
涼新たひとりの酒は二合まで
うかうかと終へる歳月青無果花

棒パン 奥田筆子

ハウスとなる狭庭坪庭秋の風
行先が思ひ出せない凌霄花
わが影を憶えてゐたる大鎌月
棒パンの腕振り秋を一めぐり
口角の泡もつつしみ夏負けもせず

神麓集

神麓集

森林限界 井上菜摘子

わたくしの森林限界マフラー巻く
友情のつひの連弾冬オリオン
父の木枯ははの凧米を磨ぐ
枯野行くふたり言葉を照らし合ひ
冬あをぞら水平線と落合へり

一葉忌 村田あを衣

鄙ぶりの心情添へて新米来
木の実しぐれここは木曽路の国境
切り札の裏より暮るる冬至かな
一葉忌筆のかすれも厭はざる
仏心に翳りはあらず石路あかり



京鹿子集

鈴鹿呂仁選



祇王祇女仏御前も秋の蟬

語部の老語らるる敗戦忌

秋扇内侍の本音読みきれず

タブーの如く葡萄一房夜の机

蓮池の風に五感をリセットす

かなかなや右愛宕への標石

身終ひのこゑの限りを秋の蟬

遠忌修し昨日のつづきぶどう食ふ

密集は元より好かぬ牛蛙

十葉を干して門前裏通り

京田辺 山中志津子

京都 井尻妙子

青ふくべ破調の風を寄せつけず

顔のない鏡はみだす花白粉

不感疾うにすぎ吾亦紅の時間

小鳥くるおでこで測る体温計

秋思いま複製フェルメールブルー

新涼や存問ありて戸を敲く

母のなき生家しののめ草に会ふ

秋深しごとりと自動販売機

ありたけの身の丈見せて曼珠沙華

雲湧きて消えて背高泡立草

城陽 鷺山 珀眉

福山 亀井 福恵

胸中の穴に風あり蚯蚓鳴く

福知山 西村 白杼

待宵や思ひ果てなき月旅行

ひと言の段差つまづく秋扇

夏みかんイエスと言へぬ十三歳

冬瓜汁邪魔せぬやうに生きてゐる

待宵の空へ溶けゆくたなごころ

蛸や風うら返す渡し跡

きのふよりけふの影濃し赤とんぼ

秋のこゑきこゆる合せ鏡かな

盆の月わたしの影に水の詩

鶏頭や十七文字の無限なる

大花火祈りとなりて胸に咲く

指揮棒より九月の雨の生れけり

終章の前書きにおく濃竜胆

膝抱けば身中に吹く風は秋

河晩夏棒立ちとなる水位計

カンナ燃ゆその残り火を身の内に

窓越しの手をふる別れ星月夜

風の私語昏るるに早き嵯峨白秋

野宮の苔へ荷を解く秋の蝶

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

大 阪 本郷 公子

罇雲かぞへ切れない義理不義理

遠花火ひき寄せる君の面差し

はたはたの尿落すやたなごころ

表札の風船葛からみぐせ

手折りてもまだ風のもの花芒

あさまだき鄙住み涼の冥利とす

山峡の風の精なる晩夏光

芯のある風の向くまま猫じやらし

真打ちに影打ちの妙月明か

五十肩弓手を庇ひ秋耕す

かなとこ雲散じ今夜はラタトウイユ

さざ波の先に秋の鯉跳ねる

天高し宇宙飛行士募集中

秋めくやふと腰掛けるボンネット

秋簾バスすり抜ける旧街道

ポスターの舞妓はふたり陶器市

京 都 見館 定子

北 桑 田 中野 弘子

栗 東 小谷 知里

アリゾナ 伊吹 之博

